Link

2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Link

【Nコード】

N9656W

【作者名】

2

【あらすじ】

優等生だけど頭の堅い少年・八坂洋一。ある秋の夜、駅のホームで『旅人』に出会い、前世の記憶を取り戻す。決して交わるはずのなかった人たちとの再会。そして、十六年前に自殺したかつての自分。蘇る記憶がもたらしたのは、二つの生を結ぶ物語。（基本的に、一日一話ペースで更新。できるといいな）

1 ある秋の夜1

前世があると信じたことは、これまで一度もなかった。

理由は簡単だ。お化けやサンタクロースと同じ。僕のような理屈っぽい人間に、前世なんて概念は信じられない。だって誰も証明したことがないんだから。前世があると言いふらす人も、どこか胡散臭いものだと思っている。

だから僕は断言する。そんなものを追い求めるより、もっと自分のためになることに人生の気力を注ぐべきだ、と。

だけでもし仮に、前世があるとするなら。

きつとどこかで、前世の自分とつながっているのかもしれない。

あの旅人は言った。死んだ人間はこの世に生まれ変わるのだと。そして僕は、前世の記憶を思い出した。

……そう。思い出して、しまったのだ。

「がー！ もう疲れた！」

開始三分で持田は音を上げた。目の前には山のような問題集と参考書。ノートは新品同様の空白。僕は友達として情けなくなった。

「まだ一問しか解いてないだろ。それじゃ今度のテストに間に合わないよ」

「だってよー、わかんるところばかりだもん」

「普段復習しないからつけが回ったんだ。勉強しないとわからなくて当たり前」

聞く耳持たず、というふうに住田は机に突っ伏した。勉強を教えたと云った当の本人は、早くも終戦ムード。

僕は仕方なく持田の教科書を取った。

「……これか。式をグラフで表せばずっと楽になる。三十秒で解け

るよ」

「でもよ、どんなグラフを書けばいいのかわかんねえんだ」

「じゃあ解く前にまず公式を覚える。でないと赤点はまず確実だろ
うね」

今度のテストで赤点なら、持田は留年の危機に陥る。

勉強をしてこなかったのは自業自得だと思いつつも、クラスの級長として、そして友達として放っておくことはできなかった。テスト勉強を手伝っているのもそうした理由からだ。

放課後、僕はこうして図書室に居残って持田の面倒を見ている。

ただ、中々成果は上がらない。

「勉強なんてさ、ほどほどにやればいいじゃん。ねえ」

「……それ、留年寸前の君が言うセリフじゃないよ」

「はっは、まあそうだな」

半ば冗談で言ったのだろけど、僕にはあまり面白くなかった。

クラスの大勢の生徒は、持田のようなことを真顔で言いのける。

ほどほどにやればいい、嫌いなことはやらないでいい……僕からすれば、逃げ口を叩いているようにしか見えない。学ぶことを嫌がる人間は、きまって怠惰になる。それは確信をもって言えることだった。

僕のこの考えは正しいと思っていた。

「まもなく閉館時刻となります。校舎に残っている生徒は速やかに下校してください。繰り返し連絡いたします……」

ふとノートから顔を離すと、持田がすでに帰る準備を済ませていた。その背後の時計は、日没時刻を過ぎている。

「帰ろうぜ！」持田は元気よく言った。

外に出るとすっかり日が暮れて街灯がともっていた。

「くああ、俺こんなに勉強したの久しぶりだぜ。まったくよ、お前

はあんなに座りっぱなしで腰が痛くならねえのか？」

「別に。それより持田って、家で復習とかしないの？」

「俺はやらん！」

そんな自信たっぷりと言わないでくれよ。

本来自分のテスト勉強に充てるはずの時間をこの人の手伝いに費やしたんだから。

それで堂々と赤点とってもらっちゃ困るんだよ。

……そう言いたかったけれど、とりあえず堪えて苦笑いで済ませよう。

「まあこの調子だと何とか赤点は免れそうだしな。あと何日か面倒を見るよ」

「マジで？ おう、お前がそう言うなら信じていいんだな!？」

「馬鹿。このペースで行けば、という意味だよ。今はまだ基礎の『キ』と『ソ』の間ぐらいだ」

「お、おう……」声の調子が一気にしぼんだ。
空に月が出ていた。

本来なら家に帰っている頃合いだが、しばらくはこのくらいの遅さになるのだろうな、と何気なく思った。

取り留めもない話をするうちに駅前に辿り着いた。一つの路線しか通らない小さな駅だ。

「じゃあ俺はここで」持田は言った。

「乗らないのかい？」

「悪いな、俺バス通学なもんで」見ると、駅前にいくつかの停車所があった。

持田と別れて改札口を通る。

駅のホームは地方の小さな町によくある簡素なものだ。時間帯もあつて、人の数は少ない。

僕はホームの先頭で待つことにした。乗るのはいつも一両目だった。降りる駅の階段のつくりから、この位置が最も近いのだ。

二人ほどそこにいた。

一人は大学生ほどの男で、携帯電話を片手に誰かと楽しそうに話をしてる。付き合いがいいのだろうな、と直感的に思った。

もう一人は僕と同じ高校の制服を着た女子。ヘッドホンで音楽を聴いている。見かけない顔だから、同じ一年の生徒ではないだろう。おそらく上級生だ。

もちろん二人とも他人同士。親しく声をかけることもなく、後からやって来た僕には見向きもしない。

「う、ううう……」

……傍のベンチにもう一人、見落としていたらしい。女性が気持ち悪そうに口元に手を当てていた。ずいぶん酒に酔った様子だから、飲みすぎなのだろう。

どこか旅行者のような雰囲気を出していた。

2 ある秋の夜2

(あの人大丈夫かな?)

僕の不安は電車に乗り込んだ後も消えなかった。斜め隣の座席に座り込む女性の顔は蒼白だ。明らかに飲みすぎが原因だろうけど、先ほどからずっと何かを堪えている様子から見ると、少し危険な状況にある。

先頭車両には、僕と旅行者らしき女性を除けば、二人しかいない。先ほどの上級生と大学生。どちらも女性の異変に気付いているようだった。

いたたまれなくなった僕は席を立った。

「あの、すみません」

生気を失った女性の顔が、僕に向けられる。口を押えているため言葉は出ない。

僕は鞆からビニール袋を取った。帰りがけに持田とコンビニに行ったとき、飲み物を買っていた。これは、その時のコンビニ袋だ。僕にはあまり必要のないものだし、容量が大きい袋なのも幸いだ。

「これ、よろしければ使ってください」

こくり、とその女性は一度だけうなずいた。

僕は急いで視線を外し、少し席を離れた。後ろで気持ちの悪い光景が始まった。どろどろした液体が袋に飛び散る音の感触、久しぶりに聞いたような気がする。

(……嫌なこと思い出すなあ)

あれは中学のころだ。

昼休み後の授業、午後一時半くらいだったか、教室で横の席の生徒がぶるぶる震えていたことに気が付いて……その瞬間にはもう、

腐った酢の匂いが教室に広がっていた。あの後しばらくはラーメンを食べなかつたような気がする。

あのことを思い出してしまった。忘れよう。今は窓の外を見て、夜の景色を楽しもう。

「あ、やばい……」

車内がスクリーンのように映るガラスの向こうで、隣のシートにいた上級生が立ち上がった。

振り返って、彼女の行く先を追った。どうやら女性にまた何かあったらしい。その手には同じようなコンビニ袋が握られていた。

米のとき汁のようなものが、少し床にこぼれ落ちていた。

かなりの量をもどしたのだろう。もう一つ袋が必要だったか。

「ねえ、その君」女性の背中をさすりながら、上級生は僕を見据えて「次の駅に着いたらでいいから車掌さんを選んできてくれないかな。お願い」

「そいつは俺がやるよ」

答えたのは大学生の男だった。

「いいんですか？」

「いーつて。これでも飲み会で酔った奴の介抱には慣れてるもんでね」

「じゃあ僕は床を拭いておきますね。できれば新聞紙みたいなものが欲しい所ですけど」

「……ありがとね」

それは女性の声だった。ひどい姿になっているけれど、峠は越した雰囲気だ。

「あ……大丈夫ですか？」

「うん、あなたのおかげで、だいぶん楽になったわ」

上級生は安堵したように一息ついた。

それと同時にアナウンスが流れ、次の駅が窓の外に見えはじめた。

「お酒の飲みすぎはよくないですよ」僕は言った。

「ごめんごめん、あはは」

「笑うところじゃありませんよ」

「ここは少年の言う通り、かな」大学生の男は気さくに笑う。「ま
ー過ぎたことは仕方がないんじゃない？ ただ、この人たちに礼く
らいは言うべきだと思うな」

「……お礼ねえ」

「いいですよ、別に」僕はことわった。見返りを求めてやったこと
じゃない。隣にいた上級生も同じ意見だった。

「またの機会つてことでいいかな？」

女性はそう告げた。

「こんなんでも、昔からほら、受けた恩は返す、つてのが私の主義
なんだ。あなたたち三人には、いつかまた、ね」

僕たちはお互いに顔を見合わせた。

「大丈夫かな、あの人」上級生が僕に語りかけた。「どうしてあんな
になるまで飲んだんだろうね」

それは僕にもよくわからなかった。

女性は大学生と共に前の駅で降りていた。あの様子だと二日酔い
は確実だ。

車内には僕たちのほかに誰もいない。黙っているのもなんとなく
変なのでこの人と話を交わしていた。

「私はあなりたくないな。正直、吐いた物を見るのは精神的にこ
たえる」

「ですね。駅の職員の苦労が少しだけわかった気がしますよ」

「たまにプラットホームでもどす人がいるよね。毎回アレを処理す
るなんて私にはできないな」

「でもあの人を介抱したじゃないですか？」

「苦しそうな人は放っておけないもんでさ」

彼女は朗らかに笑った。

「……ところで、見たところ同じ高校の人みたいね。きみ、一年の子かな？」

僕はうなずいた。

「ヤサカヨウイチっていいいます。『八』つの『坂』に、洋楽の『洋』に『一』って書きます」

「私は二年の若菜綾。きみからしてみれば先輩ってことになるのかな」

この日はテスト前最後の部活で、いつもより帰宅が遅くなったらしい。僕にはあまり実感のない話だった。クラブには入っていない。

「こんな時間までやって疲れませんか？」

「無駄に体力だけはあるんだ」若菜はそう言って「自慢じゃないけど私、生まれてから一回しか風邪ひいたことないのよ。ま、それだけが取り柄なんだけどさ」

僕が降りる二つ前の駅で、若菜と別れを告げた。

3 ある秋の夜3

そうして誰もいなくなった車内で、僕はゆったりと座席にもたれかかった。

視界の端にちらりと映る、少量の吐しゃ物。床にまだこびりついている。原因はあの酔っ払いだ。

(……そういえば、お礼って結局、なんだったんだろう)

あの女性とは互いに面識がないはずだった。それはおそらく、若菜もあの大学生も同じだったろう。

またの機会と言っていた。それがいつかは知らない。次に偶然会ったとき、という意味なのか。

いや、泥酔した人の言うことだ。本人も次の日になればすっかり忘れてのことだろう。受けた恩は返すと義理堅いことを口にしていたけれど、たかが口約束だ。それに僕も、お礼が欲しいだなんて思っていない。

首を振って、思考を打ち切った。

車内アナウンスの駅名を耳にして、僕は席を立ち上がった。

今から思えば、きっかけはほんの些細なことだった。

酔っ払いの介抱をしたというだけの、ありふれた行為。本当に、きっかけは日常の中でもよくあることだった。当然の選択だった、と言うべきだろう。あの場にいた誰もが、当たり前前の行動をしたに過ぎない。

しかし、時にはそんな何気ない行動が、人生を変えてしまうのだろう。僕の日々は、その時を境に新たな方向へとつながってゆく。かつて自分自身が通った道の存在を、僕は知ってしまう。

『雨城結太』という、道の名を。

4 再会1

九月十六日。

テストまであと一週間。基本的にこの期間において部活動は休止。下校時刻も早めだが、校舎から独立して建つ図書館など一部の場所は逆に下校時刻が延びる。

生徒会あてに届く落し物も、このころには教科書やファイル、プリント類ばかりだった。クラスの級長としてたまに生徒会室を訪れる僕の目にも、そういったものをよく目にする。

昼休みの賑わう廊下を、生徒会室へ向かう。学校から配布物を受け取らなくてはいけない。

「失礼します……あ」

生徒会室の扉を開けた僕は思わず声を出してしまった。教室内には、こちらに背を向けてパソコンの前に向かう生徒が一人。後ろに束ねた髪、少し日焼けした外見。見覚えがあった。

「若菜先輩？」

「むぐ」

振り返った上級生の頬がリスのように膨らんでいる。

傍らに購買の焼きそばパン。一袋空っぽだ。

「むお……君たしかあの時の」

「どうも」

「ちよい……待って」パンの残りを一気にほおばって「なんだ、八坂も生徒会の委員なの？」

「いえ、僕はクラスの級長としてここに」

「そっか」若菜は机の山積みになったプリントを乱雑にあさって、中から複数のプリントを僕に渡した。僕はひとまず礼を言った。

「……テスト期間における特別規則っての？ よくわからんけど。学校側からの通達はそれで全部」

プリントに目を向ける。細かな校則の注意書きがびっしりと印字

されているが、前文に目を通す人はいないだろう。

そしておそらく、何年も使いまわしているに違いない。こんな面倒な書類を、毎年作成するようなことは誰だつてしないに決まっている。

とはいえ、これらを教室の後ろにある掲示板に貼るのが級長の役目だ。何であれ、規則には従うべきだ。

「紙の無駄だと思うけどねえ」若菜はつまらなさそうに呟いた。

「ところで、生徒会の人たちはどこに？」

「本来なら担当の子が二人いるんだけど、一人は職員室に呼び出し、もう一人は欠席でさ。でも校則として昼休みに誰かいないといけな
いから、私が代役をやってるの」

「面倒じゃないですか」

「もちろん報酬は戴いたよ。紙パックのコーヒーだけど」

ふふん、と得意げに笑みを浮かべる。紙パックは机にあった……

水滴が垂れて、下のプリントを濡らしていた。

ふと、僕をまじまじと見つめてる若菜の視線に気づいた。

「八坂。ちよつといいかな」

「何ですか？」

「実はね、昨日の酔っ払いに会ったんだ」

ほんの刹那だけ記憶を手繰り寄せる。一日前のことを思い出すのに、それほど頭は使わなかった。

「電車の中で吐いた人？」

「そう、その人。今朝のことなんだけどね。昨日のことでお礼をした
いたって」

「お礼って何でした？」僕は尋ねた。あの女性の言葉は少し引つか
かっていた。それだけに、若菜の話には興味があった。

ほんのわずか、彼女はためらうような仕草を見せる。

「……あれ、なんていうか、これ説明しづらいな」

「え？」

「ねえ、君は前世ってヤツを信じる？」

唐突な質問だった。

「あの女のひと、占い師みたいだね。人の前世を占って旅をしているらしいんだ。ちょっと怪しいけどね」

「ということは、お礼って」

「特別にタダで占ってもらったよ」

拍子抜けした。

そりゃ期待してはいなかったけど、それ以上に肩透かしを喰らった気分だ。占い。日常生活に必要なこととは到底思えない。

「それで、前世を占った結果は」

「病弱な女の子」

言った傍から若菜は鼻で笑った。

見るからに丈夫そうな人には絶対に似合わない言葉だ。

「あと、そのうち前世の記憶を思い出さるうってさ。今のところ私にそんな実感はないけどね」

「……あの、ひょっとして、僕のもとにも来るんですか？」

「同じ制服だったし、見つけるのにそう時間はかからないかもね」

僕はたったいま、『ありがた迷惑』という日本語を思い出した。

それでも校舎を出るのは、夜になってからだ。放課後も持田の勉強を見なければいけない。

持田の学力は軒並み平均点以下だが、特に数学が致命的だった。

中間試験で学年最下位をとってしまい、今季も小テストでは壊滅的だ。まだ学年の半分とはいえど、留年の危機は十分にある。

「なあ八坂。お前ってよくこんなこと続けられるよなー」

持田の声は、誰もいないラウンジに響いた。

「何が？」

「勉強」

僕は好物のカフェオレをすすった。ラウンジの自販機で買ったものだ。街中の自販機より値段が安いのは、学生用に設けられているからだろう。

何時間も椅子に座るのは体に悪いということ、何分か休憩を取っていた。窓の外は日が落ちていた。

「何事も集中すれば、ずつとやれるものだよ」

「すげえな」。俺には無理だ」

「持田も何かひとつくらい好きなことあるだろ。それに打ち込むのと変わらないよ」

「じゃあお前、勉強が好きなの!？」

「どうだろう」

声を荒げた持田に、僕は首をわずかに傾げた。

「ただ、学ぶことは好きだね。それは数学の問題を解くことだけじゃなくて、色々なこと」

「色々?」

「上手くは言えないかな。もう少し年齢を重ねれば、学びたいことが見えてくると思うんだけど」

「うう、お前の考えてることはよくわからん」

「親からもそう言われてるよ。でも、好きにさせてもらっさ」

自分はこれまで勉強をし続けてきた。その行いが正しいかはわからない。

けれど、自分の進む道は正しいと信じている。それだけは、胸を張って言えることだった。僕はこれまでの十五年半で、周囲の期待を裏切るようなことはしたことがない。あってもささやかな悪戯ぐらいだろう。ましてや犯罪に手を染めるような真似は絶対にしないつもりだった。

僕は犯罪が嫌いだ。

どんなに小さくて軽いものでも、法律で認められない行為は悪だと考えている。そんなものに関わることなく、そんな人と付き合うことなく、僕は正しい道をまっすぐ歩けばいいと信じている。

これまでも、これからも。

きつと僕は優等生として、自分の生きた道に誇りを持つだろう。

5 再会2

この日の夜は少し底冷えがした。吹き付ける風に、つい最近までの熱気を感じない。

空を仰いだ。西の方向から雲が低い位置に下りている。日付が変わるころには降りださだろうかと、僕は何気なく肌で感じた。

いつものように駅のホームを先頭へと歩く。

昨日はそこに酔った女性が口元を押さえていた。

今日は……見覚えのある女性が佇んでいた。

僕の姿を見て、軽く会釈する。顔立ちの整った、綺麗な女のひとだった。吐き気を堪えていた昨日からは想像もつかない。

「こんな時間まで学校に居残るのね」女性は感心そうに呟いた。「部活じゃないとしたら、夜遅くまで勉強ってところかな」

若菜の話から僕を探していることは知っていた。問題は、

「……いつからここに？」

「君の学校が終わる時間帯から、ずっと」

わずかに身構える。いいよのない気持ち悪さを覚える。そうではなくとも、ちよつと非常識だ。

「お礼なんていいですよ。気持ちはありがたいですけど、正直そこまでしてもらわなくてもいいです」

「うん？ あの二人から話を聞いたのかしら」女性は意外そうな顔を向けた。

「ええ、まあ」

「そう。じゃあ話は早いわ」

女性は近くのベンチに腰掛けた。どこか遠くを見据えながら。僕と彼女との間を、何かがひんやりと吹き抜ける。

「お礼をしたかったけど、やめる」女性はため息をついた「だって、なんだか二人とも迷惑そうだったし。多分あなたもそうかって」

「……」

「昨日はごめんなさいね」

本心からの言葉だと受け取った。

「これでも酒には強いほうなんだけど、昨日は一日中飲み明かしちゃってね。色々と迷惑をかけちゃったし。何かお礼をしたかったけど」

「別にいいですよ」

虚空に目を泳がせていた目を、僕に戻した。

「その代わりね」口元はにんまり笑っていた。「ちょっと協力してほしいことがあるわけなんだ」

「占いですか？」

「そう。あなたの前世を思い出させるの」

昼間の話を思い出す。前世を見てもらったと、若菜は言っていた。「本当に？」

「私には造作もないことよ」

近くの警報がけたたましく鳴り響いた。

しばらくたつて、アナウンスから、前の駅で車両故障が起きたことを知った。駅に来るまで時間がかかるだろうと。

「なんだか怪しいな」

「どう判断するかは、あなたに任せるわ」

「そもそも前世なんて概念、存在するのかどうかわからないのに」

「前世は存在しないと考えるのも自由。まだ誰も証明できていない現象だから、信じないのも当然と思うわ」

「それじゃ、あなたはもうなんですか」

「前世は存在する」相好を崩した。「命は巡る。死んでいった後、人はその記憶を持って生まれ変わる……ある宗教ではそれを、輪廻転生と呼ぶわ」

輪廻と転生。

環の中で、命はとどまることなく、どこかにつながる

「ただ、殆どの人は前世の記憶を思い出さないまま、人生を全うするの」女性はその説明して「広い世界の中で、前の自分を知る機会なんて奇跡的な確率だからね。それこそ海の中の小石を探すのと同じ……だから、忘れたままの前世の記憶を思い出させるには、それなりの能力を持った占い師の力が必要なのよ」

「占い師？」

「旅をしながら生計を立てるには、占い師という肩書きだと都合が いいの。もっとも、一人前になるには修行を積まないといけないんだけどね」

僕はふと気づいた。

「それじゃあ、お礼をしたっていつのは」

「そう。本当は自分の修行のため」薄く笑う。

「……やっぱり、自分のためか」

「はい、そうとわかったら目を閉じて！ 電車が来る前に始めるよ」僕はしゅしゅベンチに腰を下ろした。

「目を閉じて」

そこに、静かに語りかける。

「まず頭の中を空にするわ。余計な雑念が生まれるだろうけど、それを追わないこと。考えることは捨てて……」

言われるままにひととおりの動作を行う。

まるで座禅をするかのようだった。

「……思考の波を収めて」

僕はその言葉に従った。額に手が当たるのも、気に掛けないように努める。

「……凪いだ湖の底が透けて見えるように、ただ無心でいるの」イメージを心の中に植え付ける。周囲の物音も、光も、遮断していく。

旅人が何かを呟いたが、その言葉の意味を考えない。

どれくらいの時間が経っただろう。

いつまでかかるだろうか？

はやる気持ちを抑える。

芽生えた疑問を消す。

静かに時を送る。

ばちん、と。

何かの切れる音が脳裏にこだました。

「もういいよ」

その言葉に、僕はうつすらと目を開ける。

「……何も変わってないような？」

「しばらくはね。でもそのうちあなたは思い出すわ」

そう言っ隣ベンチに腰を下ろす。

「前世の記憶を？」

「あなたが生まれる前の、はるか昔の記憶をね」

電車が目の前に寄って、その扉を開ける。

僕はおもむろに鞆を持って席を立った。

「私がしたのは、あくまで扉の鍵を開けただけ」言葉を紡ぐ「開いた扉の中を見るかは、あなた次第。少し間を置いたら、思い出してみなさいな」

「……わかりました」

「またね」

旅人はそう言って、僕を見送った。発車と共に景色が後ろに流れ、やがてその姿は暗闇の中に消えていった。

6 再会3

……本当に前世が存在するのか、僕にはわからない。

あの旅人の言うことを信じてみようと思うけど、もともと非科学的な根拠のないモノは信じないのが僕の性格というものだ。それでも、ちょっとだけ期待はしていた。

だって、自分の前世を知れるというなら、誰だって好奇心は湧くだろう？

すべての記憶を一気に思い出すわけではない、とあの旅人は言った。

泥水に満たされた水槽だと思えばいい。まだ栓を抜いただけの状態で、濁った泥水が引いてゆくに任せ、徐々に水槽の底が見えてくる。人の一生分の記憶だと思えば、膨大な量だ。ひとことに前世の記憶と言っても、思い出すのに時間はかかるだろう。

あと、記憶にも序列はあるらしい。すぐに思い出せる新しい記憶もあれば、あやふやな昔の記憶もある。誰でも物心つく前の記憶は、ほとんど思い出せないだろう。

(……でも、もう一週間だ)

カレンダーの日付を見た。九月二十三日。『そのうち』というには、語弊がある。長い時間が過ぎた。

前世の記憶を思い出すことは、なかった。

(これはちよつと、からかわれたかな)

「八坂、この問題が解けたぜ」

僕は我に返った。図書室の机に向かい合う持田が自信満々にノートを突きつける。

「どれどれ……うん、答えは合ってるよ。でも、この解き方じゃ計

算が複雑すぎるよ。テストで同じ問題が出たらどこかで計算ミスする危険があるな」

「えー！ だって俺その解き方しか思いつかなかったし」

「定理を使えば、このタイプの問題はあえて式を展開しないでも楽に求まるんだ。まあ、教科書じゃ扱われてない定理だから、知らないのも無理はないかな」

「こいつを丸暗記すりゃいいんだな！」

「暗記は禁物だって初日に言っただろ。今はそれでよくても、忘れたらそれまでだ。学年末試験で大変なことになる」

「う……じゃあ八坂が教えてくれよー」

「問題集に説明があるから自分で読みなよ」

うめき声をあげる持田をよそに、僕は立ち上がった。

「どこへ行くんだー？」

「参考書を取りに、ちよつとね」

そう言い残して室内を所狭しと占める本棚の迷路に入る。県内でも有数の規模を誇る図書室だけあって、蔵書量はかなりのものだ。参考書一つ探すだけで苦労がかかるのは難点だけれど。

スペースのあちこちに生徒を見かける。しゃがみこんで本の内容をメモに取る人。何冊も抱えて机に戻っていく人。静寂な室内に、急ぎ立てるような空気が張りつめている。

(……もうテスト前日か)

僕は小さく息を吐いた。いいよのない疲労を感じていたからだ。持田の手伝いに気を取られて、最後まで自分のテスト勉強は思うように進まなかった。それで少し苛立っているのかもしれない。

(結局、あの旅人の言っていたことも嘘だったんだなあ)

苛立ちついでに、僕は先週のことを思い出す。前世があると言っておきながら、何も思い出さない。いや、そもそも前世なんて存在しないのだから、思い出す記憶なんてないのだ。そうに決まってる。もはや、そんなのは考えるだけ時間の無駄だ。

(占いペテン師と言ってやりたい気分だ、まったく。あんな詐欺師

に金を払う人がいるだなんて、気が知れないよ)

心の中で鼻であしらっても、やることは変わらない。

今は、テストのことだけを考えるのが正しい選択というものだ。

余計なものは無視して、通り過ぎればいいのだから

「八坂？」

外からの声。放ったのは持田だ。立ちすくむ僕を不思議な面持ちで見据えている。

「こんなところでどうした？」

「いや……参考書が中々見つからなくて」

「それよりさ、テスト範囲の問題全部解き終わったんだ。ちょっと見てくれねえかな」

「ん、ああ。わかった」

僕は頷いて、持田の後に続く。

棚の間を抜ける前に、もう一度振り返った。

(……幻聴?)

持田に呼ばれる直前に、声がしたのだ。

(……俺は、道を誤った……か)

その声は、耳の奥で。

その言葉は、脳裏に響いた。

僕は何度か首を振って、考えを閉じた。

いつもより早く校舎を出たせいも、まだ空を覆う色は明るい。持田のテスト勉強がひととおり終わったからだ。

「あと、テストでは解ける問題から解くことだ。僕から言えることは以上！」

「おっけー」

間の抜けた持田の声が返った。

「……大丈夫かい？」

「おうよ！ だってテスト範囲全部に目を通したんだぜ？ 問題も全部解いたし。テストで八十はかてえかもな」

「五十五くらいが限界だ」

「なんで！」

「君が解いたのはあくまで公式や定理に沿った基本問題だ。テスト問題の比率から考えて、全部解いたとして五十点。まあそのうちの八割はいけるだろう。応用問題に関しては十点いけばいいほうだよ。当初から想定していたことを口に出す。

「僕が指定していない問題があっただろう。そこからもおそらくテストに出るだろうね」

「ちよ、ちよっと待てよ！ どうしてそれを教えてくれなかったんだよ？」

「まず一つ、基礎問題を解けないと絶対に攻略できない問題だから、基礎を重点的に固めることにした。そしてもう一つは、時間的な制約から。その証拠に、基礎問題をこなしただけで精一杯だっただろう……。そ、そりゃそうだけどよ。俺もっと点取らないとやばくなるんだって」

「そういえば、中間試験で何点だったんだ？」

「八点」

「……へ？」

僕は石のように固まった。

口を半開きに、呆然と。

「ど、どうしたよ」

「大丈夫。基礎はこなしただから、初見でも対応できるさ」

「お、お、おい、信じていいのかよ。まさかお前、俺が中間試験で八点だったことを忘れてたんじゃ」

「忘れてなんかいないさ。せいぜい二十点くらいかと思って対策を練ったわけじゃないから、安心しなよ。それじゃあな！」

僕は早足で駅の改札口をくぐり抜けた。全身に嫌な汗を流しながら。

持田から逃げるように階段を駆け上がる。近くにいた男が何事かと振り返るのも気にしない。

「……まいったな」

ホームで息を切らしながら、僕は壁にもたれかかった。想定が甘かった。最初にあいつの点数を聞いておくべきだった。八点なんて聞いてないよ。

学年ブービーで二十三点。それも確か僕のクラスだったはずだ。他のクラスよりも数学の平均点が異様に低かった理由にいまさら気づいた僕は、級長としてとても身につまされる。

(……うう、頭が痛い)

壁に頭をつけてうなだれていると、どこからか聞き覚えのある声があった。

7 再会4

駅のホームを左右に見渡した。この場にはいない人の声だと判断し、僕はホームの外に目を向ける。線路の両側に位置するホームは、仕切りを隔てて外の道路に接している。外に見える箇所に移動して、僕はフェンス越しに探す。

「……あれは」

声の主は若菜だった。駅前の片隅で、男と談笑している。あの迷惑な旅人が嘔吐したとき車内にいた、大学生風の男だ。

楽しそうに話をしている。知り合いだったのかと思いかけて、僕はふと疑問が浮かんだ。違う。あの時は二人とも、お互いに他人同士だったはずだ。僕も含めて、三人は見知らぬ人だった。

(……いや、僕が気にすることでもないか)

のぞき見はやめよう、とばかりに目を離す。そうしていつものようにホームの先頭に向かう。先頭車両に乗れば、降りる駅の出口にいちばん近いから。

「あの占い師、本物だったよね。すげーよな」

ぴたりと足を止める。

僕は今、怪訝な表情をしていることだろう。もう一度フェンスに寄った。二人の話が妙に気になって仕方がない。

心のどこかに、そんなことあるはずがないと決めつけていた。

話の内容から、おそらく僕の知る占い師もどきの旅人だと理解した。旅人の話から、すでにあの二人の前世を占ったことは聞いている。問題はそこからだ。何が、『本物』だというのか。

『徐々に、思い出していく』

そんな旅人の言葉が頭に浮かぶ。

逆にいえば、それは思い出そうとしなければ始まらないのでは
ないか。

僕は最初からあの旅人に半信半疑だった。疑ってかかっていた。
その思い込みと、テスト対策に忙殺されていたこと。二つがうま
く重なって、たまたま『そのこと』を考えていなかったのだとすれ
ば。

子供のころの記憶を思い出すと、同じように……

突然、発車の合図が耳に入る。

電車が来ていたことに気づき、僕は急いで踵を返した。

駆け込むと同時に扉が閉まる。ゆっくりと、足場が揺れる。窓の
外の景色が動き始めて、あの二人の姿はすぐに見えなくなった。

僕はしばらく、流れる景色を見つめていた。

……思い出すだけで、よかったというのか。

それならば、あの人を嘲るのは間違っている。誤解していたのは、
僕のほうなのだから。

正直、前世なんて存在しないと決めつけていた。それは言い換え
れば、偏見だ。もっと、柔軟に考えよう。

なんだってそうだ。あるかもしれないという可能性。それを、最
初から偏見で否定しては、何も進まない。

でも、信じるのは一度だけだ。僕は理屈のないことは鵜呑みにし
ない。

ただ可能性を試していないから、それまではオカルトじみた考え
でも信じてみよう。

先頭車両に乗客は少ない。ほどよく空いた車内で、腰かける座席
はいくらでもあった。

えんじ色のシートに背を預け、僕は目を閉じた。

考えれば、生前の記憶だ。十六年以上前も昔のこと。今までずっと眠っていた記憶を、すぐ思い出せるわけがなかったのだ。

ある限りの記憶を、昔へと辿る。

中学生の記憶から、時間をさかのぼる。幼稚園となるとほとんど忘れていく。物心がついた、最初の記憶に行き着く。父親の投げたサッカーボールが顔面に当たって、痛くて泣いていた。その先は、何も覚えていない。

その、さらに先。

生前の、記憶。

僕は何者だった？

何処で暮らしていた？

いったいどんな人生を送っていた？

旅人のという言葉を、信じてみよう。僕は、すべてを知っているはずだ。今まで僕の持っていた記憶のほかに、見慣れない思い出が存在するなら、きっとそれが、前世の記憶だ。

僕は

自分の手に、冷たい感触が当たった。

僕は目を見開こうとして、景色がぼんやりしていることに気付いた。

水の滴った手が震えていた。

僕は、泣いていた。

「あ、れ？」

まぶたを触る。手のひらが濡れた。

心臓が波打つ。頭が疼く。まばたきをいくらしても、抑えていた手に暖かなものが流れてくる。

涙が、止まらない

俺は、いつから道を誤った？
どうしてこんなことをした？

俺は、馬鹿だ。

何もかも、俺の手で壊してしまった。
この手で、環を

「あ……うあ……」

思い、出した。

思い出して、しまった。

僕は両手で頭を抱えた。

力の限り掻き毟った。

そうして獣のように咆哮した。心を涸らし、何もかもを壊すように。

8 再会5

どれくらいの時が、経っただろうか。

いつのまにか僕は、自分の部屋の扉にもたれてうずくまっていた。部屋の中に明かりはない。カーテンも閉め切っている。外は真っ暗だ。

どうやって家に帰ったのだろう。何も覚えていない。その直前に車内で座っていたはずだ。

奇声を上げて、それっきり。

たぶん、あの場にいた人はびっくりしただろうな。

……思い出さなければ、僕はどれほど幸せだっただろう。

認めない。

認めたくない。

あれが自分だと認めてしまえば、その瞬間、僕は吞まれてしまう。

「……顔、洗ってこよう」

手について立ち上がろうとする。足が震える。無理矢理に力を込めるけれど、バランスが崩れてドアに当たった。

扉の外は廊下だ。薄暗く、足元もおぼつかない。ガラス窓の向こうに深い闇がのぞく。

階段を下りて一階へ。突き当りに洗面所はある。風呂場につながる小さな個室だ。

家には誰もいない。

「……そういえば、出張だったっけ」

幸いだ。これでも余計な心配はかけたくない。

蛇口から流れる水は冷たい。けれどその冷たさが、今は心地よかった。

その冷たさは、僕と世界をつなぎとめていた。実感を与えてくれる。

生きているのだと。

だから、ほんの少しだけ、心が安らぐ。

部屋の時計は一時を回っていた。頭を働かせて、ようやく真夜中の一時だと悟る。

僕は眠ろうとしなかった。

ずっと意識を保っていたら、思い出すことはないのだから。

夢を見るのが怖かった。

今はまぶたの裏の闇さえおぞましい。

時計の針の刻む音が、僕を支えてくれる。

また、目の奥が熱く疼いた。

涙は、涸れ果てていた。

外に人の声ができるのを聞いて、ゆっくりと窓を見やった。

朝はカーテンをすり抜けて僕のもとに現れた。期末試験の日だ。

最初の科目は数学。持田の勉強を手伝ったおかげでテスト対策は不十分だし、万全の準備で臨めないだろう。珍しく今回は不安だった。しつかりしなきゃ。

支度を整えて、いつものように登校しよう。遅刻なんてもってのほかだ。

世界が揺らいで見えた。

毎日通いなれた道を進み、見慣れた駅に入って、提起を改札に通し、混み合ったホームに出る。

電車が来るのを待って車内に乗り込む。手すりにつかまりながら何駅目かで降りる。さらに歩いて高校に辿り着く。

同じ習慣に身をゆだねて。

何も考えない。

周囲の喧騒が、僕を突き上げる。

教室で何人かの知り合いに声をかけられた。いつものように僕は挨拶した。

最前列の自分の席に座った。隣から持田が話しかけてきた。なんだか顔色悪いぜって、聞こえたような気がした。

机に教科書を広げた。中身が頭に入ってこなかった。そのうちに担任が現れて、大きな問題用紙を教卓に置いた。

教室に日直の号令が轟く。担任からテストの説明を聞いた。用紙が配られ、教室内がしんと静まり返った。

チャイムが鳴った。一斉に紙をめくる音。ペンが机の上を走る音。僕は着実に問題を解いていった。思った通り、前半は基礎問題だ。

難なくこなして、応用問題に取り掛かる。これも理解している。手順をたがわず、式とグラフを書きこんでゆく。

何も考えたくなかった。

このままずっと、走り続けたかった。

一度でも、止まりたくなかった。

残り一問となつて、解答用紙もほぼ埋まった。時間もまだ半分。計算ミスも一つ一つ確認済みだ。どうやらテスト前の不安は杞憂に終わったようだ。

そこで手が止まった。

この問題を解き終えたら、僕は何をすればいいのだろうか？
ずっと、待つしかない。

何もしないで。

何かしてないと、走り続けないと、いけないのに。

止まりたくない。

待ってなんていたくない。

でないと、思い出してしまう。忘れようとしていた、悪夢を。

「……………環」

衝撃が頭を揺らし、視界は暗転した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9656w/>

Link

2011年9月27日02時17分発行